

名所化する遺跡

—— 静岡前墓所伝承地の二〇〇年 ——

一、はじめに

日本歴史の中で、ある場所が名所となる要件を考えてみよう。日本の古代・中世において、名所とは、そこが景観、歴史、文学などで、人々の想像上の関心を集め、人々に広く知られる場所である。中世までの名所(ナドコロ)は、和歌の題材である「歌枕」の地として、現地を実際に訪れずとも、多くの歌人の関心を集めた場所だった。

人や情報の交流が活発化した近世に、名所(メイシヨ)の要件はさらに付加される。ひとつは、名所の情報がさまざまな媒体を通じて発信されることで、その発信元は名所の外部である場合が少なくない。もうひとつは、行動文化としての旅が一般化し、人

々が名所を実際に訪れることが可能になったこと。こうして名所は、情報発信と行動文化の二点で、行楽の客を積極的に誘致する観光地へ展開する契機を迎えた。

日本の旅の歴史に関する研究を主導してきた新城常三は、日本人の旅を【原始・食糧採集の旅】【古代・課役の旅】【中世・信仰の旅】【近世・遊樂の旅】と理解した。そして近世の旅を「民衆の最大のリクリエーション」と規定し、治安の安定と交通網の整備をその要因に求めている。一方で観光学は、観光を「定住や賃金労働を伴わないことを前提に、非定住者によるある地域への旅行や訪問、あるいはそれから発生する関係や現象の総体」と定義する。そして古代・中世の旅に強い宗教色を見出し、その世俗化や宗教改革の影響を受けた一八世紀以降、知識追求の観光が隆盛すると論じる。³⁾ ここで旅における宗教行動とリクリエーションの分

白井哲哉

岐点は、明らかに信仰心のあり方である。

日本では、中世末における統一権力の形成過程において、織田信長の一向一揆弾圧や比叡山延暦寺焼き討ち、豊臣秀吉らのキリスト教弾圧など、宗教勢力の徹底的な排除が進行した。その到達点である近世社会は、前代まで人々の持っていた宗教心が希薄化した時代と評価することができる。例えば村落の寺院は、キリシタン禁制政策の一環で村人の戸籍管理所となり、教義の布教ではなく、冠婚葬祭の執行や寺子屋教育などで人々と日常的に接したのである。

この大きな潮流の中で、日本近世の旅は「信仰」の契機を次第に失い「観光」の契機を強めていった。そこで青柳周一は「観光地域史」を提唱し、近世の旅人たちを勧誘し受容して成立する地域の具体相を分析した。また白井哲哉は、中世までの経済基盤を失った寺院が経営資金を獲得するため、自らを名所化した事例を紹介した⁴。ここでは江戸住民が参詣者誘致のターゲットになっている。

これらの研究に求められる課題は、名所が発見されて、人々が観光行動を起こすまでのプロセスの解明である。すでに古代ローマから、ごく少数の貴族や知識人による観光は開始され、彼らの探訪地が後代の名所になった。これは日本の名所（ナドコロ）と同じ経緯と言えよう。そこでは、名所を訪れる契機が必ずしも宗

教心に基づいていない。また、その情報は知識人など、しばしば地域の外からもたらされてきた。

そこで本稿は、ある遺跡が名所として成立・展開する過程について、近世後期（一八世紀末）から現代までの約二〇〇年に及ぶ通時的な検証を課題とする。また、名所の地元住民の意識について、情報受信者の観点から取り上げていく。

分析対象とするのは、埼玉県北葛飾郡栗橋町伊坂（武蔵国葛飾郡伊坂村）に所在する、静御前墓所の伝承地である。静御前は、源平合戦の主人公である源義経の愛妾として有名で、中世の『義経記』、近世の『義経千本桜』など文学作品を通じて庶民層にも浸透した。現在も、人気マンガ・アニメ『ドラえもん』のキャラクター「しずかちゃん」の本名が「源静香」であるように、その人物像は日本人の心性に定着している。

静御前伝説については、内藤浩譽が全国を博搜してその伝説を三類型した。すなわち、母の磯禪師との関わりで故郷回帰を語る【西日本型】、源義経の後を追慕探求する【東日本型】、実は平泉で死ななかつた義経をさらに追う【平泉以北型】である。ここで【東日本型】に該当する栗橋町の静御前伝説は、後述のとおり茨城県古河市の光了寺略縁起で伝えられており、白井哲哉が近世政治権力との関わりで論じている。

二、伊坂の静御前墓所とその伝承

鎌倉幕府の正史である『東鑑』によれば、静御前は義経追求のため捕らえられて鎌倉へ送致され、その後京に戻ったという。奈良県大和高田市や京都府京丹後市など、内藤の【西日本型】に該当する伝説地では静の墓が存在する。一方、鎌倉を退去した静は義経を追って奥州へ向かい、その途上で没したとの説も各地に残されている。新潟県栃尾市、群馬県前橋市、埼玉県栗橋町、福島県郡山市など、内藤の【東日本型】に該当する伝説地では、その説を唱える伝承地が存在する。

その一つ、栗橋町井坂の静の伝承地はJR宇都宮線栗橋駅の駅前にある。後述の通り、幕末までは付近に一言社の小祠が存在した。弘化三年（一八四六）までは、高さ約一五メートル、周囲約六メートルの杉の原木が聳え、その下に高さ約六〇センチメートル、直径約三メートルの塚が存在したが、今はいずれも失われている。現在は、玉垣に囲まれた墓域に十数基の石造物が存在する。墓域の中央には、平成一三年（二〇〇一）に新造された「静女之墳」石碑が建ち、左手前の覆屋には隅丸角柱型の「静女之墳」石碑が納められる。現在の石碑はこのレプリカである。

この墓の伝承に関する記録は、実は地元に残されていない。そ

れは伊坂から利根川を挟んだ対岸、日光道中の一つ茨城県古河市中田（下総国葛飾郡中田宿）の光了寺の縁起として伝えられていた。光了寺は創建年代不明だが、一一世紀初頭に浄土真宗へ改宗したという。寺には、一四世紀前半成立で伝親鸞作の木造聖徳太子立像（茨城県指定文化財）が安置されるほか、静の遺品と伝える「蛙蟻竜舞衣」がある。

縁起の原本は文政七年（一八二四）に寺宝になったと言われ、いま我々が見られるものは、文政九年（一八二六）版の「しつかあまりやうのふいりやくゑんき静女蛙蟻竜舞衣略縁起」と題する略縁起である。ここではその内容を三点にまとめて紹介しよう。

第一は、光了寺の創建伝承である。もとは天台宗で高柳寺と称し、武蔵国葛飾郡高柳村（現埼玉県栗橋町）に所在した。その後、親鸞が当寺に逗留したことを契機に浄土真宗光了寺と改め、寺地も中田宿へ移転したという。

第二は、縁起の中心をなす静御前の伝承である。前半部分は、平安京神泉苑における静の雨乞いの舞の話で、これは『義経記』巻六に見られる。このとき静は後鳥羽上皇から舞褒美の衣を下賜された、それが「蛙蟻竜舞衣」だと縁起は述べるが、これを「あまりよのぶい」と読む理由はわからないとも告白する。古い伝承なのだろう。

後半部分は、静の奥州行から死去に至る話である。鎌倉を退去

した静は、義経が「東妻」にいると聞き、侍女の琴柱を連れて出発した。「下辺見」（茨城県古河市下辺見）まで来たとき、静は義経が平泉で亡くなったと旅人から聞かされた。悲嘆した静は、橋の上で思案した後、義経の菩提を弔う決心をする。この橋を「思案橋」という。「前橋（前林）」（茨城県古河市前林）に至ると京への目印に柳の枝を結んだ。ここに「静帰」の地名が残る。しかし「伊坂」に着いた静は、旅の疲れから息を引き取った。琴柱は静を埋葬し、墓の印に杉の木を植えた。これが「伊坂」の「一本杉」である。また、静の遺品を光了寺に納めたという。縁起はこの後に什物の一覽を掲載している。

第三は、「末書を加へ」と述べる部分である。この寺を訪れる者は従来少なかった。だが「近頃」は日光道中の旅人が立ち寄るようになり、「近々」には「御寄付」を受けて立派になったと縁起は述べる。そして大名による寄付の例が紹介され、江戸の国学者である清水濱臣らが和歌集を編んだことを紹介する。最後に縁起は、従来の略縁起の版木が摩滅したので、末書を加えて改版したと述べる。

さて、略縁起から一〇〇年以上遡る正徳二年（一七二二）『和漢三才図会』には光了寺の記述が見られる。それによれば、高柳の城主が総州栗橋（茨城県猿島郡五霞町元栗橋）へ移転したのに従って動き、その後中田へ移動したという。ここには略縁起に見え

ない元栗橋移転の話が掲載される。元栗橋は、近世初頭の日光道中成立以前における奥州街道の通過点で、「思案橋」や「静帰」はこの街道の沿道にある。また「蛙蟆竜舞衣」について、カエルや龍の名を語るこの舞衣は、もともと雨乞い儀礼に関わる什物と推定され、そこに『義経記』などの話を付会して集成されたものと想像される。

古河藩の地誌である文化五年（一八〇八）『許我志』によれば、伊坂の「一本杉」の下にはかつて正元元年（一二五九）銘の板石塔婆が立っていた。これは武蔵国東北部で最古級の中世石造物で、板石塔婆の立つ塚とは正しく中世東国における墳墓の典型的な姿である。すなわち、杉の大木の前に小塚が築かれ、その頂上に板石塔婆が建つ姿が、静の墓の原風景であった。

三、名所化する遺跡

1 静の墓への注目まで

伊坂の中世墳墓が、いつの頃からか静の墓と語られるようになった。しかしそれは光了寺縁起の中で知り得る知識である。次に、それが人々に広く知られていく過程について、表1に拠りつつ追っていく。

前出の略縁起は、かつて寺を訪れる者は少なかったが、日光道

中の往来が盛んとなるにつれ参詣者も増えたと語る。前出の『和漢三才図会』や文化二年(一八〇五)『木曾路名所図会』では光了寺を親鸞由緒の寺と紹介するので、当時は親鸞作と伝える木造聖徳太子立像への信仰を集めたことがわかる。

ここで静の伝説を有名にしたのは江戸幕府関係者だった。関東郡代の中川忠英は、関所見分や河川の視察のため、寛政九年(一七九七)と寛政十一年(一七九九)に栗橋宿周辺を訪れた。おそらくこの頃、彼は光了寺の縁起や静の墓を知り、老中の松平定信へ報告したと思われる。そして定信は、翌寛政十二年(一八〇〇)に光了寺へ「蛙蟻竜舞衣」の収納箱を寄進した。

中川忠英や松平定信が光了寺縁起に関心を抱いた理由は、幕府の蝦夷地政策にあると考えられる。これまでも幕府や松前藩は、蝦夷地支配の理論武装の一環で、源義経がアイヌの神であるオキクルミだとの話を流布していた。また当時、彼らはロシアの南下政策を受けて蝦夷地政策の再検討を迫られていた。これを機に光了寺には、蝦夷地へ派兵した秋田藩主の佐竹義和や、幕府蝦夷地御用掛の石川忠房など、蝦夷地政策関係者による寄進や参詣が続いた。彼らは、オキクルミ義経の縁者である静御前の由緒の寺に詣でることで、蝦夷地の静謐を祈願したのだろうか。

ともあれ、享和三年(一八〇三)五月、中川忠英は伊坂にある静の墓に「静女之墳」の石碑を建てた。その四年後、中川も蝦夷

地へ派遣されることになる。同じ頃、幕府は全国に及ぶ海陸交通路図の編纂を進めており、前出の石川忠房らが『日光道中分間延絵図』の調査を進めていた。当然、静の墓や光了寺は、街道絵図の描写に採用された。静の墓は「静女杉」と記され、一言社・杉の大木・塚・塚の上の石碑が描かれている。

2 静の遺跡を語る人々

「静女之墳」石碑が建立されて以降、この地には江戸からの旅人が訪れ始める。古河藩のもう一つの地誌である文政一三年(一八三〇)『古河志』には、当時の知識人の紀行文が収録されている。これに因りつつ、彼らの行動や感想をいくつか紹介しよう。

松平定信家臣で白河藩儒者の広瀬典は、随筆『旅道草』で「いかなる由緒にや光了寺といふに義経の妾静の前の舞衣を持伝へたり」と述べる。幕府昌平黌の教授である佐藤一斎も著作『日光山行記』で「蛙蟻竜舞衣」を「不審然否」と述べ、他の什物も「可疑」とする。平戸藩主の松浦静山は、『甲子夜話』で日光参詣の折に下野国で静の墓の話聞いたと述べる。なお『甲子夜話続編』では、相撲年寄の玉垣が記した文章を引用して、静の伝承を紹介する。それによれば、光了寺は文政期ころ江戸で静の遺品の出開帳を実施したようである。以上の彼らは、史実と異なる静の遺跡を疑い、あまり関心を持たなかった。『古河志』編者の小出重固も、

同様の感想だったかも知れない。

戯作者だった幕臣の大田南畝は、もう少し興味を抱いたようである。『半日閑話』巻之四「静女の事」では光了寺と「蛙蟻竜舞衣」の紹介をした後、「栗橋駅より七八丁右の方へ入、宝地渡村に静女が墓印大杉十圍に及ぶ、側に小社有、一言社と云、一言の池埋りて田地と成、別当真言京藏寺、中田の左沓里斗に静ヶ谷と云村有、奥州下向の時、静此処にて高館落城を聞、立帰りしにより、静帰りと云心也とぞ」との記述がある。「宝地渡」（宝治戸）は、静の墓がある伊坂村の小字で、南畝は実際に光了寺を参詣しているの静の墓も訪れたのだろう。

文化一三年（一八一六）、光了寺で『静女舞衣懐旧古帳』が作られた。これは「蛙蟻竜舞衣」を拝観した参詣者が感想などを和歌、俳句、漢詩などに書き記すノートの類で、国学者で歌人の清水濱臣と小林良幹が序文を書いた。前年の同一二年（一八一五）には、光了寺の門前に「祖師聖人并静女旧跡」の標柱が建てられた。光了寺が「祖師聖人」すなわち親鸞の由緒を持つことは前出のとおりだが、一九世紀初頭には静の伝承が前面に出たことになる。

さて、為永春水著『閑窓瑣談』巻之一は、「安宅の関井ニ静女の古跡」として挿絵入りで光了寺と静の墓の話を紹介する¹²。その一節を次に掲げよう。

因云、静が判官の跡を慕ひ陸奥に下らんとせしは實事ならんか、武藏国栗橋宿より西の方へ入る事四五町高柳村の内、松永といふ所に杉あり、昔よりして此杉を静の塚と言伝ふ、近頃中川君の立させまじし碑あり、静女の塚と記す、川を隔て中田宿光龍寺と云院に、静女の舞衣を藏てあり、此舞衣は静が雨を祈りし恩賞として、後鳥羽院より賜りたる袈龍の御衣なりと云、然もあらんか、その往利根川の流今の如くならざる以前は、中田の光龍寺も高柳村の内にて、元は高柳寺と稱せしとぞ、今を去る事六百五十餘年天保十二年よりの古へ、壽永二元歴の春の日は、九重の都に時めきて、月光の詠に算まへられ、槐門の貴族に慕はれ、平家追討の大將軍にさへ深く思はれし美女も、文治の秋の露と消えては、都に遠き東路の野末に残す一塊の青塚のみこそ哀なり

猶痴情をもて云ときは、淨瑠璃繪紳紙物の本にも多くしるし、狂言奇語の俳優にも、忠信静女の踊りなど、日々月々に其佛を摸し、其名を三才の子も稱しながら、江戸を隔たる事纔に十三里餘、一日にも往るべき栗橋の宿近きに、静女の塚の在事を言ふものなきは本意なけれ

春水は伊坂の静の墓と光了寺の「蛙蟆竜舞衣」を紹介し、静が都から遠く離れた地に没した様を「哀なり」と記す。その後で、浄瑠璃、絵舛紙、狂言などを通じて小児でも知っている静なのに、その墓が江戸近郊にありながら、誰もそのことを言わないのは残念だと述べる。静の奥州行の真偽は最早問われることなく、逆に静の遺跡を宣伝しようと努める様子がかがえよう。また春水は、静の墓の所在地を「高柳村の内、松永」と記した。「松永」とは伊坂の隣の松長だが、これは明らかに誤りである。おそらく南畝とは異なり、春水は光了寺や伊坂を実際に訪れることなく、人の話や光了寺略縁起などからの情報のみで記事を書いたのだろう。

その後、赤松宗旦著『利根川図志』巻二は「静女舞衣」として一項を設け、「蛙蟆竜舞衣」などを挿絵入りで詳細に記述する。但し、その情報源は前出の『閑窓瑣談』、『静女蛙蟆竜舞衣略縁起』、享和三年（一八〇三）多紀元簡『日光駅程見聞雑記』の三冊で、やはり宗旦も現地を訪れていない。だが注目すべきは、静の墓の所在地をめぐる考証である。宗旦は、『閑窓瑣談』が「高柳村の内、松永」と言い、「日光駅程見聞雑記」で「伊坂の内宝治戸」と記す点を取り上げ、「かく二処に同人の墓あるは、一はその侍女琴柱の墓なるか、考ふべし」と考察した。現地を訪れていない宗旦は、墓が二つ存在するとの説を提示し、春水の誤りを拡大してしまったのである。

さて、一八世紀末以降、光了寺と静の墓には日光道中の旅人が訪れるようになった。その見聞は江戸にもたらされ、複数の情報を受容した者が再構成して再発信された。こうした情報のキャッチボールを通じて、静の墓は人々に知られていった。

幕府関係者の参詣については、幕末の事例が確認できる。嘉永七年（一八五四）日米和親条約の締結によって箱館の開港が決定すると、幕府は松前并蝦夷地御用掛の村垣正範を蝦夷地へ派遣した。村垣の一行は三月二十七日に江戸を出発、二十九日に中田栗橋関所を古河藩の船で渡った。その後、村垣一行は中田宿の光了寺に参詣して「蛙蟆竜舞衣」を観たのち、賽銭を支払っている¹³。村垣一行は、その後の旅程でこのような参詣行動をとっていない。蝦夷地に赴く彼らにとつて、静御前の由緒の寺は特別の意味があったのだろう。

3 「静女之墳」の景観変化と地域認識

「静女之墳」石碑が建立された翌年の文化元年（一八〇四）、地元出身の俳人である坐仙の「舞ふ蝶の 果や夢みる つかの蔭」の句碑が、村人の手による初の建立物として、塚の右に建てられた。外部からもたらされた名所の情報が地元を与えた最初の影響と言えよう。言い換えれば、それまでこの遺跡は注目されなかったのではないかと思われる。

塚の頂にあつた正元元年銘の板石塔婆は、文化五年（一八〇八）

までは存在が確認できるが、その後忽然と姿を消した。文政一三年（一八三〇）『新編武蔵国風土記稿』の挿絵は、杉の大木と傍らの「静女之墳」石碑しか描かない。長らく所在不明だったこの板石塔婆は、昭和五三年（一九七八）に静の墓から一キロメートル余り離れた松長で確認された。当時の聞き取りでは、一〇〇年ほど前に二つに折れた状態で屋敷地内から見つかったという。静の没年に合致しない年紀をもつ板石塔婆は、ある時期、地元の何者かの手で破棄されたとみるべきである。

墓の目印だった「一本杉」は、弘化三年（一八四六）の洪水の後に枯死した。だが安政年間（一八五〇年代後半）、静の墓は地元の人々の手によって再整備される。後述する「静女塚碑」は、このとき「村豪柳沼氏」が静の墓の荒廃を嘆き、樹木で柵をめぐらして領域を明示したと伝える。时期的に考えて、この行為は『利根川図志』の記述に影響されたと思われる。

静の墓が再び人々の注目を集めたのは一八八〇年代後半である。明治一八年（一八八五）、東北本線上野くず都宮間が開通し、翌一九年には栗橋停車場が開業した。停車場の位置は、現在のJR栗橋駅よりやや北で、ほぼ静の墓の正面に位置した。そして明治二〇年（一八八七）、静の墓の脇に「静女塚碑」が建てられた。碑文の冒頭には、「栗橋停車場東百歩有古塚」という文言がある。碑の

撰文は、大学助教や修史館を歴任した岡鹿門である。碑文によれば、岡鹿門は同年に前出の「柳沼氏」と光了寺を訪れ、「蛙蟆童舞衣」を拝観した後に文章を作成した。碑の裏面には、建碑に出資した一八か村七五名の人名と寄進額が記されている。それを見ると、出資者は伊坂・松永・佐間・間鎌・栗橋宿・旗井・琴寄など墓の周辺村が多い。

明治二二年（一八八九）、市制・町村制施行で近世以来の行政単位だった村が合併され、新たな行政体としての町村が誕生した。このとき伊坂・高柳・松永・間鎌・佐間・島川の六村は、合併して新村名を「静村」と名付けた。中川忠英の石碑建立から約九〇年、従来の景観からすっかり変貌した静の墓は鉄道駅の開設で新たな注目を浴び、それが地域認識に大きく影響を与えて、ついに地域の結集軸となったのである。

四、観光地化する遺跡

一九世紀末に静の墓は駅前名所として定着し、その知識を近代文学が伝えるようになった¹⁴。明治二八年（一八九五）の『東京朝日新聞』に連載された饗庭篁村『水戸の観梅』は、上野駅から小山経由で水戸へ向かう一行が栗橋駅に近づく列車内で静の伝説を聞かされる話を書いている。この紀行文を裏付けるように、明

治三二年(一八九八)野崎左文著『日本全国鉄道名所案内 関東之部』は栗橋駅の項で静の墓を紹介する。

大正八年(一九一九)の『講談倶楽部』第九卷第五号に、女性流行作家だった長谷川時雨が短編小説『終焉の巻 静御前』を発表した。あらすじは、京へ戻った静御前が奥州をめざして旅立ち、下総国古河の渡りして義経の死を聞いて悲嘆の内に息を引き取るものである。このモチーフは古河・栗橋の静の伝説以外に考えられず、長谷川の夫で埼玉県東部出身の三上於菟吉から着想を得たかも知れない。この小説は好評を得たと思われ、同一年(一九二二)には宗教家の田中智学が、光了寺縁起を下敷きとした戯曲『栗橋の静』を発表、上演した。

このように文芸作品で静の伝説が注目され、埼玉県では史蹟名勝天然記念物調査が進んでいた同二二年(一九二二)、静村役場は静の墓の維持管理と顕彰活動を目的に、現在も活動する静御前遺跡保存会を結成した。地域の結集軸だった静の墓が、文芸作品で注目を浴びたことで、外部への発信源へ変化し始めた。

当時の静の墓の景観を、昭和四年(一九二九)『埼玉史談』創刊号の岩井八郎「静女の墓と伝説」から窺おう。岩井は静の墓を、栗橋駅の柵の向こうに「カラタチの生垣を以てしたる百坪ばかりの森を見出すであらふ」、しかし「カラタチの生垣とは名ばかりのかに墓所の境界を止めるにすぎない垣根」と言っている。静の

墓に関しては、もと杉の大木が目印であった、今は銀杏の木の下に建つ「静女之墳」石碑が墓である、石碑の右側に少し小高くなつた場所が杉の大木の跡である、等を述べている。実は、その高い場所こそが静の墳墓であつたが、当初の景観の記憶はすでに失われていた。

また岩井は、侍女の琴柱の墓が栗橋駅の北に存在したが、その後消滅したと述べている。琴柱の墓の話は、実はこれ以外に確認することができない。前出の赤松宗旦は静の墓の所在に関して、一つを琴柱の墓と推定していた。おそらくは、その後誰かが赤松の説に依つて琴柱の墓を探し、比定したものでらう。その存在は昭和四年段階でもう確認できなかったが、新たな地元の伝承となつていたのである。

表2は現在確認できる墓域内の石造物一覧である。静の墓をめぐる建碑活動は昭和期に活発化したことがわかる。その最初である昭和四年九月一日、静の墓の脇に「義経招魂碑」と墓域の門柱が建立された。建立者は、双方とも地元の間ではない。

「義経招魂碑」の建立者は小谷部全一郎である。小谷部は、大正一三年(一九二四)『成吉思汗ハ源義経也』、昭和八年(一九三三)『満洲と源九郎義経』、同一〇年(一九三五)『義経と満洲』など、大正末から昭和初期に源義経Ⅱジンギスカン説を鼓吹した人物である。彼は、昭和五年(一九三〇)『静御前之生涯』刊行

に先立ち、源義経の供養碑を建立したのであった。墓域の門柱は東京市民からの寄進で、左に「旧跡光了寺」、右に「静御前之墓」と刻されていた。九月一日は、光了寺が伝える静の命日である。当日の除幕式に至る様子は『東京日々新聞 埼玉版』で何度も報じられている。

小谷部の建碑活動の影響につき、昭和六年（一九三一）九月五日、香積山人なる人物が義経と静の間の子の供養碑を建立した。碑題の命名は小谷部全一郎、題字の筆は光了寺住職である。昭和五年（一九四〇）銘の石灯籠は、栗橋宿で旅館「一水」を経営する東京の内藤一水社が奉納した。ここで建碑活動は、明らかに観光振興の意味を帯びていた。

五、現代を生きる名所——まとめにかえて

昭和二九年（一九五四）、墓域の玉垣がめぐらされ、静村の歴代村長、栗橋町長、静村会議員らが名を連ねた。翌三〇年（一九五五）に、静村は栗橋町と合併してその歴史を閉じている。玉垣は、旧静村関係者が地域のアイデンティティーを、村名の由来である静の墓に求めた証と言えよう。同三五年（一九六〇）には、静御前七五〇年祭が開催された。墓域には埼玉県知事の揮毫による記念塔が建てられ、栗橋町議会議員、地元選出の県会議員や国会議

員が名を連ねている。静村の消滅後も、静の墓は地域の統合の象徴として生き続けたことがわかる。その後、静の墓は栗橋町指定文化財（史跡）となり、地元で唱歌「静を偲ぶ」が作詞・作曲されて、現在も栗橋町の小学校で歌われている。昭和五五年（一九八〇）九月一日日に墓域は拡張整備されて新たな玉垣がめぐらされた。事業主体は静御前遺跡保存会で、墓の前にはその後売店が開かれた。

平成七年（一九九五）、「静女之墳」石碑が長年の風雨による損傷のため覆屋に納められ、新しい墓石が置かれた。平成一七年（二〇〇五）にはNHK大河ドラマ『義経』が放映され、全国各地の義経関係遺跡が一躍脚光を浴びた。栗橋町の静の墓も例外ではなく、数多くの史跡巡りツアーが企画され、多くの人々が訪れて、現在に至る。

現在、墓域の前には新しい説明版が設置され、「当地の伝承をもとにしています」と注釈の上で静の伝説を紹介している。墓の前の売店では静の名を冠した和菓子が売られ、旅行者が求めて帰っていく。平成五年（一九九三）以来、栗橋駅前商店街は「静御前まつり」を開催しており、毎年九月一日には静御前遺跡保存会主催の墓前祭が行われ、一〇月中旬には栗橋駅前商店街主催の静御前パレードを挙行する。いまや静の墓は栗橋町の一大観光スポットで、町を挙げた情報発信が続いているのである。

さて本稿は、静御前の墓所と伝える遺跡が一八世紀以降に名所化を遂げて、現代の観光スポットに至る過程を追ってきた。その経緯を辿れば、もとは光了寺縁起に基づく伝承を有した中世墳墓だった。しかしそれは、光了寺縁起の世界の中に過ぎない。はじめ地元で静の伝承をどれだけの村人が知っていただろうか。まして、日光街道を行き交う旅人が光了寺に参詣しなければ、誰も知ることがなかった。

それを寺の外へ引きずり出し、最初に情報を発信したのは、当時の政治的関心から源義経北行伝説に注目していた江戸幕府関係者だった。享和三年(一八〇三)「静女之墳」石碑の建立後は、興味を示した江戸の文人たちがその存在を宣伝し、静の墓は名所として広く知られるようになった。

すると今度は、地元の村人がこの中世墳墓を新たに「静の墓」として認識し始めた。しかし、元来が地元の伝承でないためか、「静の墓」の情報は常に外部からもたらされ、地元はそれに左右されていく。江戸文人らの著作で、墓の所在の誤った考証が載せられても、逆にそれに適応する形で伝承が形成されたのはその好例である。

近代に駅前名所になった静の墓は、新しい行政体の名の由来となり、多くの文芸作品を通じて、静の墓は地域のアイデンティティーの形成拠点となった。この時点では、静の墓の真偽など最早

どうでもいいことである。静村の消滅の後、その意識は逆に強化され、現在は栗橋町の町おこしを担う観光スポットとして生き続けている。

地域の中の遺跡が、外部からの情報によって名所となり、地域へ新たな認識を植え付ける。それが定着すると、今度は地元から情報を発信する観光地化が進行する。その情報を受け取った外部の人間が、さらに新たな情報を地域へもたらしていく。このような名所をめぐる情報のキャッチボールもまた、旅をめぐる日本文化のひとつと理解していただければ幸いである。

注

- 1 新城常三「旅」(『日本史大事典』四、平凡社、一九九三)を参照。
- 2 徳久球雄・塚本珪一・朝永宗彦編著『地域・観光・文化』(嵯峨野書院、二〇〇二)、五三頁。
- 3 青柳周一『富嶽旅百景―観光地域史の試み』(角川書店、二〇〇二)。
- 4 白井哲哉「近世鎌倉寺社の再興と名所化」青柳周一・高埜利彦・西田かほる編『近世の宗教と社会Ⅰ 地域のひろがり』(吉川弘文館、二〇〇八)、二七一―二九六頁。
- 5 内藤浩譽『静御前の伝承と文芸』(國學院大學大学院研究叢書 文学研究科一三、二〇〇四)、三五〇頁。
- 6 白井哲哉「源義経伝承を語らせたのは誰か」『北海道・東北史研究』

- 二(二〇〇五)、四七―五五頁。
- 7 『武蔵国郡村誌』一四(武蔵国葛飾郡)(埼玉県立図書館、一九五五)、四六〇―四六一頁。
- 8 縁起全文は6、五一―五二頁を参照のこと。
- 9 『埼玉県板石塔婆調査報告書』(二九八二)、七四五頁。なお諸岡勝氏の御教示による。
- 10 菊池勇夫「義経『蝦夷征伐』物語の生誕と機能——義経入夷伝説批判」『史苑』四二―一・二(立教大学史学会、一九八二)、八五―一〇一頁。
- 11 光了寺所蔵。企画展図録『よみがえる歴史ヒーローの伝説——直実、重忠、静御前たちと文芸作品——』(さいたま文学館、二〇〇八)では序文の写真を掲載する。
- 12 以下、『閑窓瑣談』のテキストは、さいたま文学館蔵本を利用した。
- 13 大日本古文书『幕末外国関係文書附録之二』(東京帝国大学、一九一七)、六六頁。なお谷本晃久氏の御教示による。
- 14 以下の記述は11を参照のこと。
- 15 小谷部全一郎については、土井全次郎『源義経伝説を作った男——義経ジンギスカン伝説を唱えた奇骨の人・小谷部全一郎伝』(光人社、二〇〇五)を参照。

表1 静御前墓所の名所化をめぐる事項年表

年代	事項
寛政 9(1797)	幕府関東郡代の中川忠英が就任直後に栗橋関所を見分
寛政 11(1799)	中川忠英が栗橋付近の河川普請を視察、この頃幕府へ報告か
寛政 12(1800)	幕府老中の松平定信が光了寺へ「静女蛙蟆竜舞衣」内箱、外箱を寄進。
享和 3(1803)	中川忠英が墓の左手前に「静女之墳」石碑を建立
同	多紀元簡著『日光駅程見聞雑記』に「静女之墳」石碑の記載
文化元(1804)	伊坂村民が墓の右脇に句碑「舞ふ蝶の 果や夢みる つかの蔭」を建立
文化 3(1806)	幕府道中奉行編『日光道中分間延絵図』に「伊坂村 静女杉」の記載
文化 4(1807)	中川忠英が「静女蛙蟆竜舞衣」箱の袱を寄進、同年に蝦夷地へ派遣される
文化 5(1808)	古河藩地誌『許我志』に光了寺と静の墓の記載
同	秋田藩主の佐竹義和が「静女蛙蟆竜舞衣」箱の袱を寄進
文化 12(1815)	光了寺門前に「祖師聖人#静女旧跡」の石碑建立
文化 13(1816)	清水濱臣が『静女舞衣懐旧古帳』序文を執筆
文政 5(1822)	この頃までに大田南畝『半日閑話』巻四「静女の事」成立
文政 6(1823)	幕府の地誌調所が『新編武蔵国風土記稿』調査のため栗橋来訪
文政 7(1824)	幕府元蝦夷地御用役の石川忠房が光了寺縁起の原本を表装
文政 9(1826)	光了寺が「静女蛙蟆竜舞衣略縁起」版行
文政 13(1830)	古河藩地誌『古河志』に光了寺、静の墓、関係文献の記載
同	『新編武蔵国風土記稿』成立、「静女之墳」の記載と挿絵あり
天保 12(1841)	為永春水『閑窓瑣談』で静の墓を紹介
弘化 3(1846)	洪水のため墓の一本杉が枯死
安政 2(1855)	赤松宗旦『利根川図志』で光了寺と「静女蛙蟆竜舞衣」を紹介
安政 4(1857)	この頃、村民の柳沼氏が墓域を整備
明治 17(1884)	埼玉県編『武蔵国郡村誌』伊坂村の項に「静女塚」の記載
明治 19(1886)	静御前墓の正面に栗橋停車場開業
明治 20(1887)	墓の右脇に「静女塚碑」建立
明治 22(1889)	町村制により伊坂・高柳・松永・間鎌・佐間・島川の6村で「静村」成立
明治 28(1895)	饗庭篁村『水戸の観梅』で静の墓と伝説を紹介
明治 31(1898)	『日本全国鉄道名所案内 関東之部』で栗橋駅の名所として静の墓を紹介
大正 8(1919)	長谷川時雨『終焉の巻 静御前』発表
大正 11(1922)	田中智学『栗橋の静』発表
大正 12(1923)	静村役場で静御前遺蹟保存会結成
昭和 4(1929)	小谷部全一郎が静の墓の脇に「義経招魂碑」を建立
昭和 5(1930)	小谷部全一郎『静御前之生涯』刊行
昭和 30(1955)	昭和の大合併により静村と栗橋町が合併、栗橋町となる
昭和 35(1960)	静御前 750 年忌祭開催
平成 5(1993)	栗橋町前商店街と静御前遺蹟保存会の共催で第1回「静御前まつり」開催
平成 17(2005)	NHK 大河ドラマ『義経』放映、墓域前の売店を整備

表2 「静の墓」墓域内石造物一覧

年代	碑名等	建立者等
享和 3(1803)	「静女之墳」石碑	中川氏(中川忠英)
文化元(1804)	「舞ふ蝶の 果や夢みる つかの蔭」	坐仙
明治 20(1887)	「静女塚碑」	柳沼氏発起、75名
昭和 4(1929)	門柱一对「旧跡光了寺」「静御前之墓」	東京 角田てふ他 10名
同	「義経招魂碑」	施主小谷部全一郎
昭和 6(1931)	「静女所生御曹子供養塔」	香積山人
昭和 15(1940)	灯笼一对	内藤一水社
昭和 29(1954)	石碑玉垣	静村長ほか
昭和 35(1960)	静御前七百五十年忌祭慶賀記念塔	埼玉県知事ほか
昭和 41(1966)	手水鉢	吉永清太郎他 10名
昭和 55(1980)	墓域玉垣	静御前遺跡保存会
平成 7(1995)	「静女之墳」石碑(新造)	静御前遺跡保存会
平成 13(2001)	静女之墳修復記念碑	静御前遺跡保存会

※『栗橋町の石造物』(栗橋町教育委員会、平成14)及び現地調査により作成。